

かんさい

文化

民衆の視点から中国知って

中国出身の韓敏・国立民族学博物館教授が、母国でのフィールドワークをまとめた『大地の民に学ぶ 激動する故郷、中国』（臨川書店）を刊行した。1949年の中華人民共和国成立以来、社会主義革命の中で民衆がどう生き抜き、伝統を守ってきたのか。「等身大の中国」に迫る労作だ。

1960年生まれの韓さんが吉林省の大学で日本文学を学んだ80年代、中国では改革開放路線が進んで日米など資本主義国の情報が届き、「社会主義は優位か、近代化は順調かと反省するムードが強かった」。韓さんも母国の近代化の特質や伝統の変容を研究しようとして、進路を変更。日本に渡り、東京大大学院で文化人類学を専攻した。今回の著作は、同大学院博士課程在学中の89年から昨年にかけて、安徽省などで断続的に行

民博・韓教授、故郷調査 本に

った調査の成果だ。300人ほどの農村に住み込み、住民と話をするうち、毛沢東主席の下で50年代に始まった人民公社設立などの政策が「人々にどんな影響を与えたか、具体的に分かった」という。

国有化された土地での農作業のほか、食事も集団化され、家族というつながりは解体に向かった。血縁集団でも貧農・中農・富農・地主と階級に分けられ、後者二つは批



「よくもあしくも、『縁』が中国人を動かす」と韓敏さん（大阪府吹田市の国立民族学博物館で）

判の的に。「祖先祭祀を大っぴらにできなくなり、墓石を橋の用材にされたなど、苦難の記憶を聞いた」と振り返る。

だが、民衆はしたたかだった。「当局の前では地主を批判しても、裏ではかばったりしい。祖先祭祀もひそかに続け、伝統と血縁を守った」。改革開放後に、墓石も取り戻したという。

血縁意識は何百人にも及び、同じ神を祭る神縁、同窓の学縁などもある。中国人は古来、革命や戦乱の中で、縁を頼って生きてきた。その知恵と伝統は「社会主義の下でも消えなかった」とする。こうした縁のネットワークは、経済成長を続ける中国で今も、就職やビジネスを左右している。

「中国経済の強みとされる華僑ネットワークの基礎にも縁のつながりがある。民衆の視点から、中国への理解を深めてほしい」と、韓さんは期待している。

(渡辺達治)